

CONTENTS

特集

映画で倫理学

フィクションもまたドキュメンタリーである
和島香太郎監督『梅切らぬバカ』をめぐって

上村 崇・佐藤 静・谷田雄毅・吉川 孝

序文：映画と哲学・倫理学

フィクションもまたドキュメンタリーであるということ 佐藤 静 7



©Happinet Phantom Studios Corporation

特集シリーズ

作者の意図、再訪

作者の意図はなぜ芸術解釈の問題になるのか 村山正碩 70

創造的行為における意図とその明確化 村山正碩 82

制度は意図に取って代われるのか 銭 清弘 92

特集シリーズ

小山虎

『知られざるコンピューターの思想史』

序文 長田 怜 114

小山虎氏著者インタビュー『知られざるコンピューターの思想史
—— アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』(PLANETS、2022年) 116

小山虎『知られざるコンピューターの思想史
—— アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』書評 村上祐子 134

シリーズ 哲学の居場所を探る

シリーズを始めるにあたって 稲岡大志 142

インタビュー 第1回『フィルカル』統括編集長 長田怜 144

哲学の居場所を探るために 稲岡大志 156

哲学への入門 バーナード・ウィリアムズ入門 第2回 渡辺一樹 172

シリーズ ポピュラー哲学の現在

対談「哲学と自己啓発の対話Ⅱ」第一回

企画：稲岡大志／文責：玉田龍太郎 206

報告 これが高校生の本音?!
10代に哲学が広がる可能性
和辻 龍 232

レビュー モンテーニュの〈魂〉の哲学
大西克智『『エッセー』読解入門——モンテーニュと西洋の精神史』
(講談社、2022年) 書評 筒井一穂 242

自著紹介 自著解説
『ハイデッガーの超越論的な思索の研究』について
丸山文隆 258
『「美味しい」とは何か』で消化できなかった話 源河 亨 266
『哲学の門前』余滴 吉川浩満 270

訳者による紹介 ノエル・キャロル『ホラーの哲学』
なぜ怖いものが見たいのか 高田敦史 274

編者による紹介 稲岡大志・森功次・長門裕介・朱喜哲編
『世界最先端の研究が教える すごい哲学』 長門裕介 282

コラム 新海誠が苦手だ 森 功次 286

コントロール出来ないものを
目の当たりにしたい、
それがすごい楽しい。

「ここは忠さんこんな事しないと思う」とか、
「お母さんはこういうアプローチの仕方は
しないと思う」とかっていうことを、
初めてお会いした時に
丁寧に指摘してくださったので、
ああすごく信頼できる方だなあって思いました。

フィクションもまた ドキュメンタリーである

和島香太郎監督『梅切らぬバカ』をめぐって



©映像産業振興機構 (VIPO)

和島香太郎 Kotaro Wajima

1983年、山形県生まれ。京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）卒業。2007年より短編ドラマとメイキング映像の演出を担当。2008年、NDJC 文化庁若手映画作家育成プロジェクトに選拔され『第三の肌』を監督。2014年、『禁忌』で商業映画デビュー。『欲動』（14）、『マンガ肉と僕』（16）では脚本を担当。2017年から持病のてんかんをテーマにしたネットラジオ「ぼつラジオ」の配信を始める。これを聞いたプロデューサーから声がかかり、ドキュメンタリー映画『だってしょうがないじゃない』（19）に編集スタッフとして参加。この現場での経験がきっかけとなり、『梅切らぬバカ』（21）を監督する。

序文：映画と哲学・倫理学

——フィクションもまたドキュメンタリーであるということ

2021年秋に封切られた『梅切らぬバカ』という映画作品がある。これは、自閉症という障害のある50歳の息子とその母との日常を描いた劇映画である。監督の和島香太郎氏はこの映画の着想を、以前編集を手がけたドキュメンタリー映画『だってしょうがないじゃない』からも得たという。自閉症という障害がある人が地域で暮らすその日常を撮った作品であるが、ドキュメンタリーという性質上撮れなかったものがあるという。それが、ご近所に住む人達との日々のあれこれである。交流であったり、トラブルであったり、そうしたものは暮らしの中に常にある。無人島のような自分以外誰もいない場所で、たった一人きりで暮らさないかぎり、そうしたあれこれは常に日常の中にある。そんな当たり前の日常が、ドキュメンタリー映画ではなかなか撮ることができない。もちろんそれが必ずしも不可能だということではないが、しかしカメラを向けることにはつねに、何らかの暴力性というものが伴ってしまうというのは厳然たる事実である。当人の承諾なしにその人を写すことは、ひとつの暴力である。何かを記録する時に、当人のあるいは保護者の同意というものが必要になるというのは現代社会における〈常識〉である。カメラを向けることのできるヒト・モノ・コトと、そうではないものがある。ではそこでカメラを向けられるものばかりを撮ったら、どういうことになるのか。ドキュメンタリー映画はノンフィクションとカテゴライズされることが多い。しかし、カメラを向けることそれ自体への制約というものがあるのであれば、それはノンフィクションといえるのか。

ここで佐藤真という映画監督のことばを借りて考えてみたい。佐藤真は『阿賀に生きる』というドキュメンタリー映画の傑作をうみだした。彼はドキュメンタリーのあり方を、阿賀に生きるひとびとの暮らしを丁寧に描き出すことを通じて、新潟水俣病の生活世界とそのリアリティを捉えた。とはいえ、それが当事者たちのありのままを撮ったものであるといえるのかという問いに直面する。これをみて現実とは違うという人もいる。ドキュメンタリー映画はあくま

でもカメラで写し撮られたものでありそれらはどう逆立ちしても全体とはなりえず、あくまでもショットという断片でしかありえない。それを編集することでつながりをうみだしひとつの物語として編み直すということになる。そして、ドキュメンタリーも映画なのだからどこまでもつくりものである——ドキュメンタリーもフィクションである——ということになる。

こうしたフィクション／ノンフィクションをめぐる問いは、哲学・倫理学研究の中で直面する問題に一つの解を与えてくれる可能性を秘めている。その方法論において、たとえば社会科学系の社会学・心理学・人類学等の実証の学は、事実を記述することをその本務とする。他方、哲学・倫理学は必ずしも実証的である必要はなく、そこにあるなんらかの普遍的な真理ないしは規範を、ロゴスを用いて描き出す営みである。フィクションであれノンフィクションであれ、そこで描かれたことは検討対象となりうるし、事実であるか否かというよりはそこにある核のようなものを、抽象度を上げて普遍的ななにかとして描き出すことに重きを置く。そして普遍化され吟味され抽出された真理や規範を現実社会の具体的な事象にあてはめてそのあり方の妥当性を問うという循環の中で再び問い返していくというオープンエンドな、ひらかれた対話という営みが哲学・倫理学の実践なのである。

このような抽象化—普遍化—具体化という作業を、それこそ哲学的な真理の探求と極めて類似したプロセスを経て、和島監督はある種の普遍性を劇映画の世界の中に描き出した。それが本作を観た人々に既視感と共感を呼び覚まし、鑑賞者たちにリアリティを感じさせたのだろう。本作を織りなす架空の人物たちの日々の暮らしを描き出すことを通じて、自閉症という障害がある人の暮らしの多様性と多層性を浮かび上がらせる。障害ある人やその家族の暮らしを、その深刻さと切実さを一面的な障害者観に留めず、どこかユーモラスな滑稽さというか、人間臭さに昇華させたいうでそれぞれを一人の人として描き出す。

本座談会では、フィクションとノンフィクションの異同や哲学・倫理学と劇映画構想の思考の異同をめぐる、さまざまなテーマのもと和島監督を四人の哲学・倫理学研究者が囲んで座談会を実施し、対話を通じてこの問いを深めていく。映画監督と哲学・倫理学研究者が自由闊達に語り合う、異種格闘技さな

がらの組んず解れつのダイナミズム。読者のみなさま、どうかご堪能あれ！

（佐藤 静）

Sample

梅切らぬ



あらすじ

山田珠子は、息子・忠男（忠さん・ちゅうさん）と二人暮らし。毎朝決まった時間に起床して、朝食をとり、決まった時間に家を出る。庭にある梅の木は伸び放題で、隣の里村家からは苦情が届いていた。ある日、グループホームの案内を受けた珠子は、悩んだ末に忠男の入居を決める。しかし、初めて離れて暮らすことになった忠男は環境の変化に戸惑い、ホームを抜け出してしまう。そんな中、珠子は邪魔になる梅の木を切ることを決意するが……。父親代わりの梅の木が運んでくれた“小さな奇跡”とは……。〔公式ホームページより〕

バカ

座談会メンバー紹介



上村 崇 Takashi Uemura

福山平成大学附属図書館長・福祉健康学部教授。専門は倫理学・道德教育。著書に『「ポスト・トゥルース」時代における「極化」の実態：倫理的議論と教育・ジャーナリズム』（共編著、出版学会出版部、2021年）、『いじめはなぜなくなるのか』（共編著、ナカニシヤ出版、2020年）。映画評に『「おはなし」を喚起する力—映画評：瀧川あや監督『ある精肉店のはなし』』（『年報カルチュラルスタデーズ』Vol. 3 (pp.241-251、2015年) など。



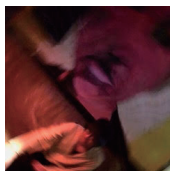
佐藤 静 Sayaka Satoh

大阪樟蔭女子大学 学芸学部 准教授。専門は倫理学。主要論文は「奴隷・女・移民——家事／ケアワークをめぐる断章」『現代思想』2022年2月号、101-110頁。「新潟水俣病事件における妊娠規制の問題——優生思想とフェミニスト倫理学の観点からの検討」日本医学哲学・倫理学会編『医学哲学 医学倫理』第38号、11-19頁、2020年。「ケアワークと性差別——性別役割分業・人種間分業・グローバリゼーション」『唯物論研究年誌』第22号、59-83頁、2017年ほか。



谷田雄毅 Yuki Tanida

フィルカル編集部。埼玉大学・埼玉医科大学看護専門学校・大正大学非常勤講師。最近の業績として「後期ウィットゲンシュタインにおける、言語ゲームの「ポイント(Witz)」概念の位置づけ——アスペクト概念との比較を通じて」(『哲学』第73号、2023年掲載予定)、「心的概念の不確実性の問題——ウィットゲンシュタインの「心理学の哲学」の観点から」(『科学基礎論研究』49巻1号、2021年) など。



吉川 孝 Takashi Yoshikawa

高知県立大学文化学部准教授。専門はフッサール現象学を中心とする哲学・倫理学。人間の生き方に目を向ける現代倫理学の可能性を探っている。著書に『フッサールの倫理学——生き方の探究』(知泉書館、2011年)、『ワドマップ 現代現象学』(共編著、新曜社、2017年)、論文に「ブルーフィルム鑑賞者であるとはどのようなことか？ 土佐のクロサワのために」(『フィルカル』3(2)、2018年) などがある。

佐藤

それでは、『梅切らぬバカ』の監督、和島香太郎さんを囲んで、この映画の魅力についてとことん語り合っていきたいと思います！はじめに読者の皆さんに申し上げておきますが、この座談会記事はむちゃくちゃネタバレがあります。なので、ネタバレはやめて！という方は作品を観てからお読みいただいたほうがいいかもしれません。ただ、これを読んでから映画を観ていただくと、ディティールまで楽しめるようになっておりますので、そうしていただいてもよいかと。

この映画『梅切らぬバカ』映画配信サイトのU-NEXTでも観ることができ、DVDも販売されております。また、上映会情報については公式ホームページで公開されていますので、そちらをご覧ください。自主上映会も可能です。

それでは、はじめに吉川さんからお願いします。

映画の中心にある梅の木というモチーフ

吉川

はい、ありがとうございます。私はこの映画を2回ほど鑑賞しました。ネット配信でしたが、とにかく面白くて、映画として楽しんで観ることができました。自閉症とか、自閉症の子どもをめぐる介護の話とか、親子関係の話とか、重いテーマがあるんですけど、基本的に娯楽作品として楽しみました。全然飽きることなく、映画に自分を委ねることができました。私は、映画と哲学や倫理学との関係を考えているんですが、映画についていつも魅力的だと思うのは、社会問題を考えるときにも、具体的なイメージを使って、そのイメージで問題の所在とか、関係する人たちの生きる状況とか、何か解決の可能性などを示すことができることです。この作品も障害者と地域住民がどう関わるかのような、結構シリアスな問題が描かれています。通常の問題を表す言葉で言えば権利と権利が対立している、住民の権利と障害者の権利が対立しているということになるんです

が、映画としてかなり具体的なイメージで表現されています。何より、あのロケーション、家のある場所、古い家と新しい家の関係が魅力的で、古い家に梅の木があって、枝が道に出ていて、それが通行を邪魔してしまっている。そうしたことが、人間関係がぎくしゃくしていることを見事に示しています。監督に是非伺いたいのは、あの家の場所とか、家の造りとか、道との関係とか、最初からああいう場所を念頭に置いてつくったのでしょうか。どうやってあのような空間が映画のなかでできあがったのでしょうか。

和島

はい、ありがとうございます。元々のシナリオでは、主人公のいる山田さんのおうちと、隣の里村さんのおうちっていうのは確かに隣り合っているんですけども、梅の木は庭から庭へはみ出しているっていう設定でロケーションを探していたんですね。ただ、なかなかそういった場所が見つからない中で、やっと二軒の家が隣り合っていて、細い私道に沿って玄関が並んでいる場所が見つかりました。それで山田さんちの庭に植わっている梅の枝がああ細い私道にはみ出しているっていう設定に変えれば、もっと里村家が山田家



苦情を言ってきたくれるだけまだいいですね。
そういうトラブルの種みたいなものがなければ、
一切かわってこようとさえしないので、
まだ苦情が来るってことはいいいんですよ。

に関わっていかざるを得ないような状況になっていくなつてことに気付いて、そこであの場所に合わせて、シナリオを書き直しました。梅の木はあの場所には元々なかったので、山田家の小さな庭に、あの大きな梅の木を運んできて、私道にはみ出すような形で作り直してもらいました。

吉川 ありがとうございます。まさに撮影現場において、いろいろな新たなイメージが出来てきて、それがほんとに上手い具合に形になったのですね。たぶん、トラブルの描き方にしても、山田さんの家から隣の家に隣接しているところで枝がはみ出しているよりも、二軒の家の前にある共用の細い私道に枝が出ていることで、毎回そこを通らなきゃいけないややこしさが上手く出ていた感じがします。

佐藤 たしかに、個人と個人あるいは二つの家庭の間のトラブルに閉じずに、社会に開かれた形にみえますよね。

和島 そうですね、取材をしていく中で、近隣トラブルやご近所からの苦情についてお話を伺ったりしました。その中で印象に残ったのは、障害^{*1}のある方のお母様が、「苦

^{*1} [編集部注] 近年、専門家はあえてこの「害」という文字を用いることが多いこともあり本企画においては「障害」という表記に統一する。

これはサンプルです。表示されるページが制限されています。

Enjoying this sample?

Buy the book to continue reading.

Sample



特集シリーズ 作者の意図、再訪

作者の意図は なぜ芸術解釈の問題になるのか

村山正碩

2022年6月4日、哲学オンラインセミナーにてワークショップ「作者の意図、再訪」が開催された。本ワークショップは意図論争、すなわち、作者の意図は芸術解釈に関与的かをめぐる分析美学上の論争を踏まえたものとなっている。意図論争は長い伝統をもつが、その盛り上がりは往年のそれと比べて落ち着いてきている。こうした状況のなか、三人の発表者（原虎太郎、銭清弘、村山正碩）は意図論争に改めて接近し、新たな論点を導入することで再活性化を図った。本特集では、二号に分けて、各発表に基づいた論文ないし報告文を掲載する。本号では銭の論文と村山の報告文を、次号では原の報告文を掲載する。

これらに先立って、本稿では意図論争にはじめて訪れる方のために、三つの問題を簡単に検討したい。すなわち、なぜ解釈の適切さを気にするのか、解釈では何が問題になるのか、作者の発言をどう受け止めるべきか、の三つである。これらの問題を扱うのは、芸術解釈において作者の意図が取り立てて問題になる理由を把握するうえで有益だからである。

1 なぜ解釈の適切さを気にするのか

作者の意図は芸術解釈に関与的かと問われて、まずこのように考える人がいるかもしれない。芸術作品をどのように解釈するかは各人の自由であって、作者の意図を気にするかもまた各人の自由だ、と。このような見解をもつ人にとって、分析美学者が芸術解釈を問題にする際に作者の意図の役割に注目し、拘泥することは、何か奇妙で、不毛な営みにも見えるかもしれない。実際のところ、

意図論争は〈解釈の正しさを気にするならば、作者の意図を気にすべきか〉という問題を扱っていると表現した方が良く、この問題を真剣に受け止めることができるかは、解釈の正しさを気にするにかかっていると言ってよい。「正しさ」と言うと、あたかも一つの解釈だけがそうありうるかのような（好ましくない）ニュアンスがあるため、これを「適切さ」と言い換えると、私たちがまず取りかかるべき問題はこうだ。なぜ解釈の適切さを気にするのか。これは意図論争の前提を問い直すものであるため、意図論争の内部では十分な回答が得られないが、重要なものである。

「アート思考」を提唱する末永（2020）は、クロード・モネの『睡蓮』を目にした4歳の男の子の逸話を紹介している。彼は作品を指して「かえるがいる」と言った。その場にいた学芸員が場所を尋ねると、彼は「いま水にもぐっている」と答えたという。そして、末永は『睡蓮』にかえるは描かれていないことを指摘したうえで、以下の主張を行う。

その男の子は、作品名だとか解説文といった既存の情報に「正解」を見つけ出そうとはしませんでした。むしろ、「自分だけのものの見方」でその作品をとらえて、「彼なりの答え」を手に入れています。（末永 2020）

末永は「自分のものの見方」をもつことを成功や幸福の源泉として評価しており、男の子はその体现者であり、私たちが見習うべき解釈者と見なされている。ここでは、正しい解釈を見つけることと自分なりの解釈をもつことが対置され、重視すべきは后者であり、前者ではないとされる。ここで、解釈の適切さを気にすべき実践的理由を明らかにすることは重要な課題となる。

この課題に応じるためのアプローチとして、まず倫理的なものが考えられる。芸術作品を好き勝手に解釈することには倫理的問題があるかもしれない（cf. Carroll 2016; 森 2014）。とはいえ、この論点は十分に検討されていない。フェイン・アートや大衆芸術の文脈では、解釈に倫理的制約はほとんどないように思われる一方、異文化の所産を自文化の物差しで解釈することには強い抵抗が

感じられるだろう。さらに、私的人格の強いエッセイや、同人作品でも、解釈にあたってある種の倫理的配慮を要するかもしれない。ともあれ、現時点で十分な考察がない以上、倫理的観点から解釈の適切さを気にすべき説得的な理由を挙げることは難しい。

今度は美的観点からアプローチしてみよう。Nguyen (2020) は意図論争に踏み込むことなく、解釈の適切さを気にすべき理由に関して興味深い議論を行っている。実際のところ、私たちは美的鑑賞において何かと解釈や評価の適切さを気にしがちである。何も『睡蓮』の観衆だけではない。『週刊少年ジャンプ』や『ちいかわ』の読者も同様だ。この事実をどう説明すべきだろうか。Nguyenは美的鑑賞がゲームプレイと同じ構造をもつことを指摘することで、私たちの実践の価値を明らかにしている。

私たちは勝利を目指してゲームをプレイするが、単に勝利に価値を置いてそうしているわけではない。むしろ、勝利を目指すゲームプレイという活動そのものに価値を見だしているのだ。たとえば、対戦ゲームでより経験豊かなプレイヤーに「ハンデ」をつけることはよく見られるが、勝利だけが重要ならば、当のプレイヤーがこれを承諾する積極的な理由はないだろう（勝ちにくくなるだけなのだから）。しかし、ハンディキャップの存在によって、勝負はより刺激的でやりがいのあるものになるため、これは広く受け入れられる。そして、勝負のあいだ、両プレイヤーは勝利を目指す、負けても時間が無駄になるわけではない。私たちは勝利を目指す活動そのものを楽しんでいる、というわけだ。

Nguyenによれば、美的鑑賞にも同じことが言える。解釈や評価の正しさを目指すとき、私たちは正しさに価値を置くわけではなく、正しさを目指す活動そのものに価値を置いている。私たちは正しい解釈を手に入れるために作品のあらゆる細部に目を凝らしたり、長い会話（ときに論争）を交わしたりするが、正しさを追求するのは、そのような楽しい観察や会話が可能になるからだ。ここで、正しさは一種の制約として機能する。この点を説明するために、Nguyenはロック・クライミングを例に挙げる。ロック・クライミングでは、安全対策としてロープが設置されるが、それを引っ張ってはいけないという制限がある。というのも、そうして登ってしまうと、単純な動作の繰り返しになっ

これはサンプルです。表示されるページが制限されています。

Enjoying this sample?

Buy the book to continue reading.

Sample



特集シリーズ

小山虎 『知られざるコンピューターの思想史』

特集シリーズ：

小山虎『知られざるコンピューターの思想史』 序文

小山虎氏の手になる『知られざるコンピューターの思想史——アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』（PLANETS、2022年）は、さまざまな意味で、本誌にとって刺激的な本となっている。

本誌は創刊以来、「文化としての分析哲学」をとらえることをひとつの使命としてきた。小山氏の今回の本は、今まで本誌では実現できなかった規模で、しかも小山氏一人の手によって、このテーマを扱っている。まずその点は驚くべきことである。分析哲学の歴史をヨーロッパからアメリカへたどりつつ、最終的にはコンピューターの歴史にまでそれをつなげる。しかも、コンピューターだけでなく、大学や研究機関のこと、国策や移民の歴史など、哲学を取り巻く「文化」には実にいろいろなものが含まれている。

この規模で一人の手によって一冊の本が書き上げられたのは、もちろん、小山氏の豊富な知識と大胆な分析によるところが大きい。さらには「ポピュラー哲学的」とも言える、大衆向きの文体と叙述方法で書かれており、その点もこのような野心的な事業を可能にしている。これは、本誌でこれまで大きく扱ってきた「ポピュラー哲学」という側面においても、また、今号から新たにスタートしたシリーズの「哲学の居場所を探る」というテーマにとっても、考察すべき論点を多々含んでいる。当然、研究書の規範に則るのではなく、こうしたスタイルをとっていることには批判もあるだろうが、それも含めて、今後の哲学書や哲学の歴史書のあり方を探るための試金石となってくれるだろう。

この特集シリーズでは、以上のような類例のない本がいかに成立したのか、また、どういう意義をもち、どういう関心を投げかけるのかを探っていく。そ

のことで通じて、「文化としての分析哲学」の実像の解明とその方法論がさらに議論され、発展していくことを望んでいる。

今号ではまず、小山氏へのインタビューと村上祐子氏による書評を掲載する。さらに本誌では、すでに2022年11月19日に、オンライン・イベントとして同書の合評会をおこなっている。これは同書で扱われたさまざまな分野の識者を迎えておこなわれ、活発な議論が展開された。2023年発刊予定の次号 Vol. 8, No. 1では、この合評会での議論を掲載する予定である。

（フィルカル編集部 長田 怜）

Sample

小山虎氏著者インタビュー

『知られざるコンピューターの思想史

—— アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』

(PLANETS、2022 年)

聞き手：長田 怜

※この本は三部構成で、19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパにおける分析哲学周辺が第Ⅰ部「ヨーロッパ編」で、その哲学が渡ってくる前後のアメリカでの哲学・社会・大学などをめぐる事情が第Ⅱ部「アメリカ編」で、そうした事情とコンピューター開発史との関係が第Ⅲ部「コンピューター編」で描かれている。

——今日はありがとうございます。まずは今回の本が出来上がった経緯からうかがって、次に本の中身についてうかがいたと思います。

1 本が出来上がった経緯

——小山さんはもともと分析形而上学の研究者ですが、この本のような歴史的な研究をされるようになったのは、どういう経緯からでしょうか？

小山 2010年から僕は著名なロボット工学者である大阪大学の石黒浩さんの研究室で働いていたのですが、形而上学の研究をする時間はなかなか作れないでいました。論文1本を読むような時間はないので、休みのちょっとした時間などにネットでいろいろ調べていたんですが、短時間で楽しくできるのは歴史を調べることだったんですね。それで、同じ石黒研の隣の席で働いていた哲学者の笠木雅史さんと、こういう歴史研究はちゃんとやるべきだと盛り上がっていました。僕はこれを自分の研究にはできないと思っていたのですが、いや、歴史研究できますよ、と彼が言ってくれたことは強く記憶に残っています。

——次第にご自身の研究として歴史研究もされるようになったんですね。

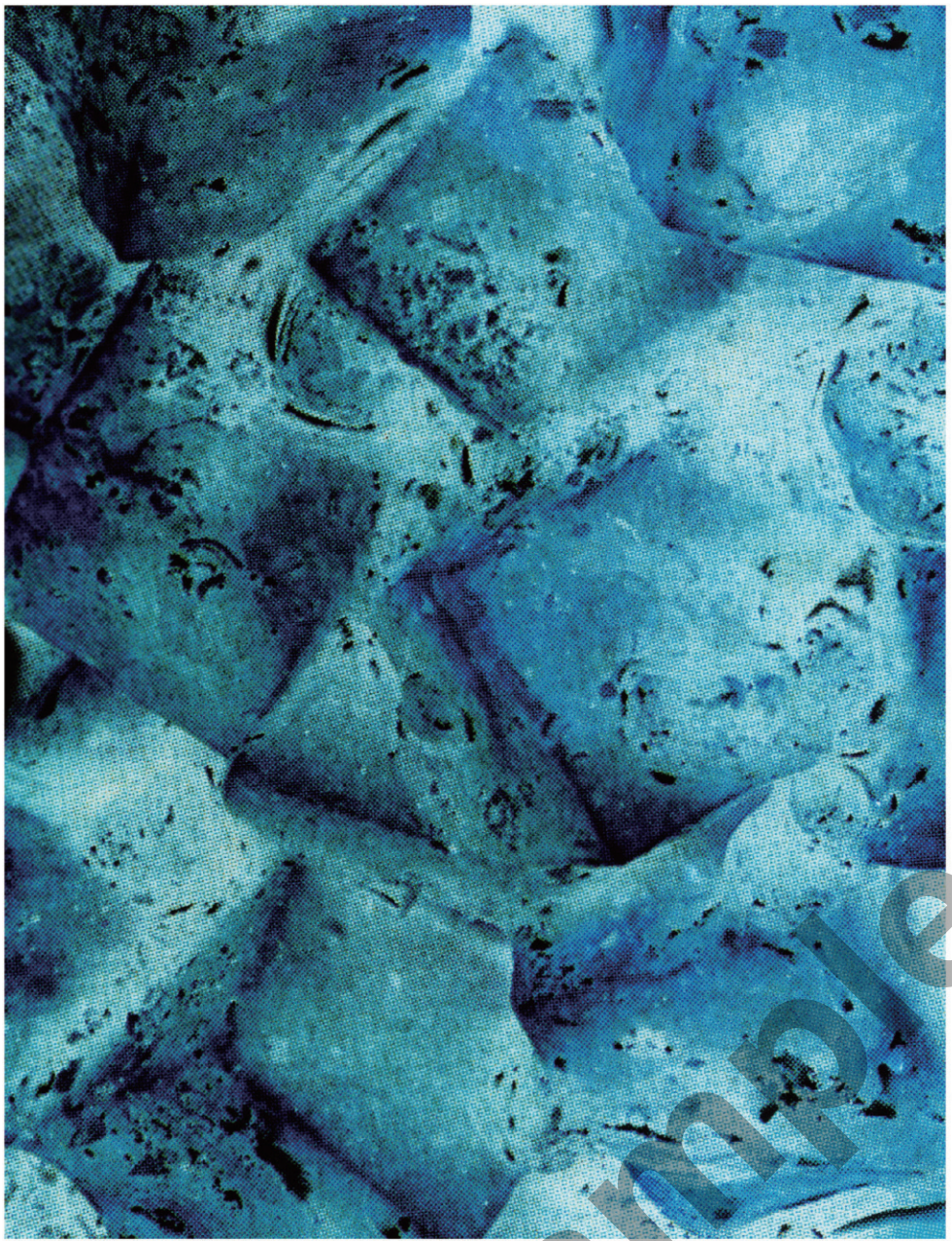
小山 そうですね。メモを取ったりして、本格的に研究するようになりました。それで、成果としてはまず、2017年に日本哲学会のワークショップ「クワイン以後のメタ存在論」で歴史関係の話をしました。このときは、イギリス系の分析形而上学はアリストテレスに近いんだけど、アメリカ系はカントっぽいところがある、というような話をしました。これはキット・ファインvsセオドア・サイダーの論争を歴史的経緯から眺める、という趣旨のものでした。今回の本の「オーストリア的」vs「ドイツ的」のアイデアにつながるものは

これはサンプルです。表示されるページが制限されています。

Enjoying this sample?

Buy the book to continue reading.

Sample



シリーズ 哲学の居場所を探る

哲学の居場所を探る

シリーズを始めるにあたって

古い言い伝えによると、人類は、本を読むときまず「あとがき」に目を通す人と、通さない人の二種類に分かれるようです。この本を書いた人はどんな人なのだろう、どういう経緯でこんな本を書くようになったのだろう、本を書き上げるまでにどんな苦労があったのだろう、といったことがどうしても気になってしまうという人は、少なくないのではないのでしょうか。書店で本を探しているとき、ついページを一気に繰ってあとがきを最初に読むという人も少なくないでしょう。こんな人にとっては、あとがきがない本に多少の物足りなさを感じてしまうこともあるのではないのでしょうか。

哲学書にもあとがきがあります。研究書であれば、どうしてこんな研究をするようになったのか、ちょっとした裏話や苦労話などが書かれていたりしますし、本文には書ききれなかったぎっくばらんな話が書かれていることもあります。翻訳書であれば、翻訳に際しての難所やこぼれ話などが読めるでしょう。こうしたあとがきは本体部分への読者の興味を高めてくれるようにも思います。でも、学会誌に掲載されている論文にはあとがきがありません。面白い論文を書いている人がどんな人なのか、知ることはできません。この人はなぜこんな論文を書いているのか、どんな苦労があったのか、論文だけを読んでいてもわかりません。

哲学は人間の営みです。対話、演劇、詩、断片、論文、など、哲学は多様なかたちで実践されていますが、共通するのは「哲学をするのは人間である」という当たり前の事実です。仕事として哲学をする人、趣味として哲学をする人、仕事とも趣味とも言い難いかたちで哲学をする人、など、哲学をする人にもい

いろいろな人がいます。哲学をする人の数だけ哲学をする背景があります。そして、私たちは、ときとして、本のあとがきを読みたがるように哲学する人の「あとがき」を読みたがることがあります。

今号から始まる新シリーズ「哲学の居場所を探る」では、さまざまなかたちで哲学を実践している人に焦点をあてて、なぜ哲学をするようになったのか、あなたにとって哲学をするとはどういうことなのか、など、じっくりとお話を伺っています。こうした問いは、哲学をする上で出会う問いとはちょっと違うタイプの問いかもしれません。普段哲学をしていろいろな問いを問うている人であっても、答えづらい問いかもしれません。でも、哲学をする姿からはなかなか見えづらいことについてあえて尋ねて、一つの読み物としてみなさんに読んでもらうことで、あとがきを読むことで本の内容への興味が掻きたてられるように、哲学に、そして、哲学をする人に、興味を持ってほしいと強く願っています。

初回は本誌創刊のキーパーソンの一人、統括編集長の長田怜さんにお話を伺いました。現在の哲学実践の状況を整理した論考と合わせてお楽しみください。

(稲岡大志)

シリーズ「哲学の居場所を探る」 インタビュー 第1回

『フィルカル』統括編集長 長田 怜

聞き手：稲岡大志・朱 喜哲

—— これまでの哲学に関する研究や実践についてお話しいただけますか？

長田 分析哲学の研究者としてずっとやってきていて、博士課程では、ある意味極端に「分析哲学」的なルドルフ・カルナップの哲学を研究しました。

分析哲学は特にアカデミックな分野で、日本ではその外になかなかリーチしていかない印象があったんですよね。それをもっと外に届くものにしたいという思いもあって、2016年に本誌『フィルカル』を研究者仲間といっしょに立ち上げました。当初から、哲学以外の文化と、哲学（という文化）との関わりが気になっています。自分の専門分野で言うと、モダニズムの時代の哲学者であるカルナップと、バウハウスなど、同時代の建築・美術の文化との関わりに強い関心があり、自分でも記事にしました。また、「分析美学」という分野は文化芸術に分析哲学的なアプローチをとっていますが、この分野の美学者たちと協働できそう、という予感もありました。それとは別に、いま『フィルカル』の編集長・副編集長を担当してくださっている佐藤暁さんや稲岡大志さんが中心となって、哲学の専門家が哲学的な観点から文化を批評する同人誌の活動もありました。そのように、これまでの自分のさまざまな関心と人脈を巻き込んでスタートしたのが『フィルカル』でした。

——最初は顔の見える繋がりからはじまったということですか？

長田 そうですね。その点、同人誌っぽいところはありません。また、分析美学の人たちのネット上の繋がりも土台になっていると思います。彼らはブログ等を通じて、ネット上で研究交流や翻訳の共有などをしていたようですが、「〇〇大学の～～研究室」のような繋がりとは異なるコミュニティがすでにあったということかと思います。ただ、「顔の見える」という点ではどうしても私自身の出身研究室である東大の哲学研究室周辺の人が多くなりがちで、当初は西日本の人たちは少なかったし、今も不本意ながらその傾向は残っているように思います。

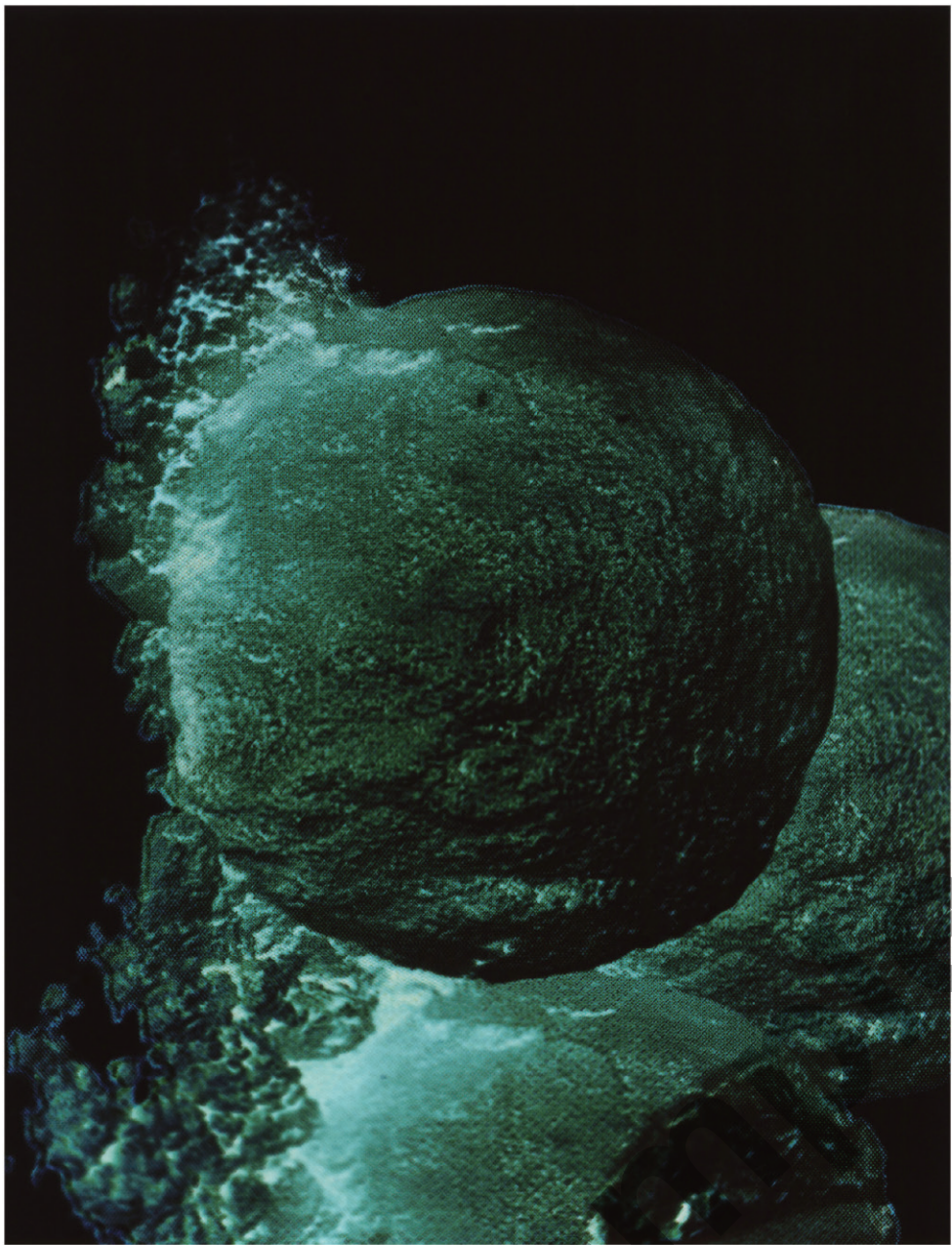
——初期の印象やリアクションはどうでしたか？

これはサンプルです。表示されるページが制限されています。

Enjoying this sample?

Buy the book to continue reading.

Sample



哲学への入門

バーナード・ウィリアムズ入門

第2回

渡辺一樹

序 つらぬかれた抵抗

1940年のベルリンに、平凡な夫婦がいた。ふたりは、しかし、妻エリーゼの弟の戦死をきっかけに危険な運動へと身を投じていく。ナチスへの抵抗を呼びかける葉書を公共の場にひそかに置きつづけたのだった。むろんゲシュタポの厳しい捜査の対象となり、やがては見つかり、逮捕される。280を超える数の葉書を置いていたハンベル夫妻は、ギロチン刑に処された。ナチスの悪を信じる人であっても、「このような行為をすべきだ」とまでは考えないだろう。葉書を置いたところで、抵抗運動を組織できるわけでもない。じじつ、葉書を拾った市民たちは、臆面なくそれをゲシュタポへと届けた。政治的な効果が小さいわりに、危険すぎる。こんなことを続けていても、意味がない。「皆がふたりのように活動すべきだ」とは誰も考えない。それでも、このふたりの活動には、倫理的に賞賛すべきなにかがある。権力や脅迫に屈せず、利害計算を度外視してまで、みずからの反戦・反ナチスの信条をつらぬく。「他のひとがどうするか知らないが、じぶんたちはナチスに抵抗するしかない」。ふたりのその態度に、なにがしかの倫理が現れている*1。

このような態度について、英語圏では、「**インテグリティ (integrity)**」がある、

*1 なお、ふたりの抵抗はハンス・ファラダの小説〈『ベルリンに一人死す』〉の題材となり、映画化もされている(邦題『ヒトラーへの285枚の葉書』)。

という。インテグリティとは、辞書的に言えば「内的な統一が保たれた状態(the state of being whole and undivided)」のことである。つまり、ひとりの人間として一貫性や統一があること、(脅迫や強制に負けずに) そのひとらしさが発揮されていることなどがイメージされ、こうした態度はそのひとの誠実さをあらわすとされる。ハンペル夫妻は、他の人びとがナチスに恐怖し服従するなかにあって、それに屈することなく、みずからの信条と行動をつらぬいた。**他のひとはどうあれ、状況はどうあれ、じぶんたちだけは抵抗をつらぬく。やるしかない。ハンペル夫妻は、やった。ほかをかえりみず抵抗をつらぬいたふたりの態度にこそ、インテグリティが現れている。**

バーナード・ウィリアムズは、このインテグリティの概念に注目しつつ、功利主義を批判したことで知られている。入門の第二回となる本稿では、この「インテグリティによる異議(integrity objection)」を中心に、ウィリアムズの倫理学理論批判をみていく。入門の第一回では、1950年代から1970年代初頭にかけてウィリアムズが、道徳心理学(moral psychology)と呼ばれる方法に着目して、言語分析に終始したアプローチとは異なるしかたで倫理学を進めていたことを確認した。行為者の行為の現場に立って、行為者がいかに感じ、行為するか、を分析することが重要である。ウィリアムズは、人間の欲求や感情の構造、一人称的な経験の現れに着目して、伝統的な倫理学の問題に着手していたのだった。このような方法は、やがて、既存の倫理学理論への批判の武器になっていく。というのも、功利主義やカント主義といった、行為の正しさの基準を示す倫理学理論は、道徳言語の分析に依拠することがあっても、行為者の感情の構造や経験の現れを軽視してきたとウィリアムズは考えるからである。つまり、既存の倫理学理論には適切な道徳心理学がそなわっておらず、それゆえに問題を抱えてしまっている。1970年代から1980年代にかけて、ウィリアムズはそのような倫理学理論批判を展開した。それは、むしろ、大きな論争を引き起こすことになった。本稿の主題は、このような論争を起こすに至る、ウィリアムズの倫理学理論批判である。

本稿は、ウィリアムズの議論を年代順に追うものであり、以下のような構成になっている。まず、『道徳：倫理学へのひとつの入門(Morality: An

これはサンプルです。表示されるページが制限されています。

Enjoying this sample?

Buy the book to continue reading.

Sample



シリーズ ポピュラー哲学の現在

対談「哲学と自己啓発の対話」Ⅱ

第一回

企画：稲岡大志／文責：玉田龍太郎

企画者によるまえがき

連載対話Ⅱ・第一回をお届けする。前回までは玉田氏の現在に至る歩みを振り返りながら、哲学と自己啓発に関連する話題について自由に対話を繰り広げていただいた。今号からは第二部の開始である。第二部では、哲学と自己啓発の関係について、具体的な哲学者を参照しつつもより活発な対話が交わされる

であろう。

今回の対話では、世事に触れつつも、「アヘンとしての宗教」と「哲学と自己啓発の区別」が話題の中心となっている。特に後者は、本連載対話の根幹をなす主題でもある。最近話題になっている千葉雅也『現代思想入門』における自己啓発への言及を手がかりにして、対話は哲学の歴史を顧みる。歴史を振り返ると、フィヒテもヤスパースも一般向けの哲学を重要視し、多彩な活動を展開した哲学者である。現代でも、他ならぬ企画者のようにポピュラー哲学の現状を追い続けている者もいる。こうした事実を知ることが、無根拠に自己啓発を肯定することも否定することもなく、そして、肯定や否定とはちがうかたちで自己啓発を評価することにつながるだろう。さらに、「自己啓発にも精神世界・スピリチュアル系の「宇宙視線」と社会的成功・対人スキル系の「人生視線」がある」という指摘は、哲学と自己啓発の区別を検討する上で、主軸の一つとなるだろう。哲学書を自己啓発思想に結びつける手付きの鮮やかさは今回の読みどころの一つだ。

さて、これまで毎回、企画者（稲岡）が、対話を読む読者にとっては邪魔でしかないのではないだろうかと思いつつも、「まえがき」をお送りしてきた。しかし、毎号お読みいただいている読者にとっては、もはや企画者による導入は不要であろう。さらに、企画者は、今号から新しいシリーズを開始し、加えて、今号のどこかに告知が掲載されているかもしれない新企画にも関わっている。したがって、そちらに注力するためにも、「企画者によるまえがき」は今回限りとさせていただきます。読者諸賢におかれては、引き続き対話をお楽しみいただくことを強く願う次第である。

（稲岡大志）

これはサンプルです。表示されるページが制限されています。

Enjoying this sample?

Buy the book to continue reading.

Sample

投稿募集

フィルカルでは随時投稿を募集しています。分析哲学と文化を主なテーマとする論文の投稿を受け付けています。

募集内容

● 文化の分析哲学

文学、芸術、映画、漫画、ゲーム、アイドルなど、様々な文化的現象を分析哲学の理論、概念、方法を用いて分析する一般理論、もしくは個別作品、作家を分析する論文

(掲載例：森功次「鑑賞前にネタバレ情報を読みに行くことの倫理的な悪さ、そしてネタバレ許容派の欺瞞」、川瀬和也「大森靖子と推論主義」)

歴史的、社会的現象など、広く応用的な話題を分析哲学の理論、概念、方法を用いて分析した論文

(掲載例：八重樫徹「何が可笑しいのかユーモアを説明することの意味について」)

● 文化としての分析哲学

分析哲学を文化として見た場合の特徴を論じる論文

(掲載例：長田怜「分析哲学とモダニズム」)

● サーヴェイ論文

上記のテーマ、もしくは分析哲学内で論じられている理論哲学・応用哲学の一般的テーマの研究状況・研究課題を紹介するサーヴェイ論文

(掲載例：岡本慎平「T. M. スキャンロンと価値の責任転嫁説明」)

投稿していただいた論文に関しては原則として二名の専門家による査読が行われ、査読者からのコメントが投稿者へ送られます。

注意事項

- ・ 投稿者は、哲学、美学、倫理学の研究者・学生であるか、これらの専門的な知識を有している必要があります。
- ・ 同時に2篇以上を投稿することはできません。
- ・ 投稿中の原稿の審査結果が出るまで、同一著者による投稿は認めません。
- ・ 投稿される原稿は、未発表のものに限ります。
- ・ 英語のアブストラクトも合わせてご提出ください。

投稿締切・投稿先

投稿締切：随時募集中です。

投稿先：philcul@myukk.org

原稿は、メールの件名に「フィルカル投稿」と明記したうえで、添付ファイルでお送りください。詳細は、ウェブサイト(<http://www.philcul.net>)をご参照ください。

フィルカル

— 分析哲学と文化をつなぐ —

令和 4 年 12 月 25 日発行

発行所 株式会社ミュー
〒113-0022 東京都文京区千駄木 1-23-3
TEL 03 3822 7374 / FAX 03 3822 7375
URL <http://www.myu-inc.jp>

発行人 榎山雄二

『フィルカル編集部』 URL <http://www.philcul.net>
Twitter @philcul_pub

統括編集長 長田 怜

編集長 佐藤 暁

副編集長 稲岡大志、朱 喜哲、長門裕介、森 功次

編集委員 青田麻未、飯塚 舜、河合大介、木下頌子、神戸和佳子、
酒井泰斗、高崎将平、高田敦史、谷田雄毅、筒井晴香、
野上志学、古田徹也、松本大輝、三木那由他、八重樫
徹、吉川 孝

企画アドバイザー 和辻 龍

制作統括 坂野美紗子

制作 飯塚 舜

渉外 谷田雄毅、筒井一穂、三浦隼暉

カバーデザイン 相島大地

本文デザイン waonica

扉作品 三保谷将史『Images are for illustration
purposes』（DOOKS 発行）より

印刷 シナノ印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替えいたします。株式会社ミューまでご連絡ください。

本書の無断複写は、著作権法の例外を除き禁じられています。

©MYU K.K.

Printed in Japan